

中学校国語科における思考力育成のための授業実践研究

－思考力・判断力・表現力の活用を通して－

高知市立青柳中学校 教諭 岡本みゆき

1. 大学院修士論文における研究の概要

修士論文では、国語科教育における「思考力」の育成について、指導者側がどのように意義を考え、目標や授方法を考えていけばよいのか、また、学習者側にとっても充実した学習の場となり、「思考力」を育成する授業にするにはどのような工夫が必要か、「①国語科教育で育成する「思考力」について先行研究より考察。②中学校学習指導要領国語における「思考力」について考察。③先行研究である授業実践事例から、教材・学習課題、授業方法・指導の工夫、育成される「思考力」の考察。④「思考力」育成に有効な、教材開発や授業方法についての授業実践研究。」といった4点を中心に研究を試みた。

2. 平成 26 年度の実践内容

(1) 研究課題と概要

本年度は、修士論文で試案した思考力の構造化を基に、国語科教育における「思考力」の育成について、どのような教材や課題が子どもたちの思考を生み出し、学習活動が思考を賦活させ、授業に対する意欲喚起につながるのか、問題意識をもち続け授業実践を重ねている。また、勤務校の教育目標や研究の方向性に照らし合わせ、すべての子どもの学びを保障するために、グループ活動を軸とした学び合いを中心とし授業改善の研究を進めている。特に「①身につけた知識や技能を活用した表現活動の場につなげる。②評価活動を含めた、基本学習・応用学習・発展学習となる単元構想（授業計画）や教材開発に取り組む。③グループ学習時の思考力育や意欲喚起につながる課題のあり方。」といった点を中心に実践研究を行っている。

(2) 平成 26 年度の実践内容

本年度は、中学 1 年生国語（2 クラス）、中学 2 年生（3 クラス）を担当している。2 年生は、昨年度から引き続き同生徒たちの授業を担当しており、昨年度の取り組みを発展させてはいるが、様々課題も山積しており教材開発や考察・検証が不十分である。1 年生は、生徒は違うが、昨年度と同様の教科書・教材を使用しているため、評価活動を含めた基本・応用・発展学習となる単元構想や教材開発など昨年度と比較しながら継続して実践を進め、新たな授業方法を取り入れてみた。そのため、本稿では昨年度とは違う授業方法で取り組んだ、第 1 学年の文学作品の実践を中心に報告を行う。

3. 中学 1 年生－文学作品を中心とした実践研究

(1) 対 象：高知市立青柳中学校 1 年 3 組（25 人）、1 年 4 組（26 人）

実施時期：2016 年 1 学期（5 月、6 月）、2 学期（9 月）、3 学期（2 月）

使用教科書：『国語 1』（光村図書）

	単元・教材名	授業の概要（授業計画）
一 学 期	○学びをひらく 【基本】「にじの見える橋」 (杉みき子)	1. 少年の心情表現や行動描写、情景描写や場面の展開に注意して読み、作品理解を深める。 2. 少年の気持ちの変化をとらえ、なぜ変化したのか、理由を考え、説明できるようにする。 3. 作品の世界と自分との共通点について紹介しあう。（グループ交流）
	【応用】「あの坂をのぼれば」 (杉みき子)	4. 同作者の作品を、人物の心情や情景を想像しながら、グループで音読の仕方を工夫する。 5. 二つの作品を、少年の心情変化・行動描写・情景描写に着目しながら読む。共通点を探りながら比読みする。個人→グループ交流→全体交流（出された意見についても比較する） 6. 少年は何によってどのように気持ちが変わったか、根拠をもちながら友達と意見交流する。（グループ交流→個人でまとめる）
二 学 期	○つながり読む 【基本】「星の花がふるころに」 【応用】「星の花がふるころに」 リライト作文・相互評価	1. 題名「星の花がふるころに」から、どのような物語が想像ふくらませたり、疑問をあげる。マッピングして、ペアやグループで交流し、全体交流。 場面の展開や登場人物の心情や行動描写、情景描写に注意して読み、作品理解を深める。 2. 主人公「私」の気持ちの変化をとらえ、なぜ変化したのか理由を考え、説明できるようにする。 4. リライト作文

		5. 相互評価・自己評価
	【発展】「大人になれなかった弟たちに・・・」(米倉斉加年)	1. 「疑問を見つけながら読もう。」という目当てのもと、形式段落ごとに読み、疑問を自由に出し合う。疑問に対する答えを、皆で意見交流しながら、読み進めていく。 2. 最終段を読み終わった後、生徒から出された疑問について、グループ交流を行い、個人思考をしながらワークシートを仕上げる。
3 学 期	○表現を見つめる 「少年の日の思い出」	1. 1・2学期学習した文学作品について、学んだことをふり返り、学習目標や授業の見通しの確認を行う。作品の「現在」の場面を読み、これから展開する物語を予想する。疑問を出し合い、予想される答えを想像する。 2. ①「過去1」の場面を読み、疑問をもち、予想される答えを考える。 ② グループで、自分の見つけた疑問について意見交流。 ③ クラス全体で話し合いたい疑問について三つ程度厳選して、黒板に板書する。 ④ 各グループで出された疑問点について、比較分類する。 ⑤ 各グループで出された疑問について、全体で意見を出し合う。 3. 「過去2展開」を同様に進める。 4. 「過去2山場」「過去2結末」を同様に進める。 5. 「過去2山場・過去2結末」で出された疑問について、前時できなかったことについて意見交流し、自分の考えをまとめる。 6. リライト作文に取り組む。 7. 相互評価・自己評価

(2) 授業の実際と考察－3学期「少年の日の思い出」を中心に－

クラス全体で通読し、準備した各場面の本文を載せたワークシートに疑問を書き込む一人読みをさせた。当初は、言葉の意味についての疑問を書き込む程度だったが、しだいに「強におう、乾いた荒野の、焼け付くような昼下がりとは、どんな季節か。」といった情景描写の表現に疑問を持つ者や、「現在の私と客の場面は、文章が少ないが、回想になると説明的な文章が多いのはなぜか。」といった構成や表記に関する疑問、「隣の少年といていたのが、なぜ、エーミールと名前がでたのか。」といった表現の仕方、「なぜ、真実を話し謝りに行ったのに、チョウを見せてくれというのか。」「なぜ、ちょうを粉々にしてしまったのか。」といった、人物の行動や心情に疑問をもつ生徒が増えていった。授業を進めるうちに、一人読みの時間ではクラス全体が静まりかえり、生徒一人一人が集中して疑問を見つけながら文章と向き合う姿になっていった。そして、生徒全員が文章を読み、何らかの疑問を見つけることができはじめた。中には、教科書の脚注や辞書をひき、語句の意味を調べる生徒も出てきた。指導者自身も、生徒がどのような疑問をもっているのか、読み終わる時間や書き込む早さも把握できた。早く読み終わった生徒は、自分の見つけた疑問に対して、予想される答えを考えたり書き込んだりするので、読み終わるのに時間がかかる生徒や支援が必要な生徒に、声をかけることができた。

グループ交流では、各自が、「自分は〇〇のような疑問をもって、△△という理由ではないかと考えた」「自分も……君と同じ疑問をもった。」とか、さらに、友達の疑問に対して「それは……じゃないかな。」「**とここに書いてある。」といったように、ワークシートを見せ合ったりしながら、文章を読解し作品を味わう姿がみられ、意見交流が活発になっていった。全体交流では、クラス全体で話し合いたい疑問や、グループで答えが見つからず、クラスの皆に意見を聞きたい疑問を3つ程度に絞り、黒板に板書させた。板書された他のグループの疑問を、生徒たちは、比較分類しながら、自分の疑問や考えと比較しその答えを考えていた。友達と意見交流することが思考の連鎖となり、友達の意見や作品に強い興味関心を持つこととなり、作品世界を味わうことにつながったと考えられる。また、リライト作文の学習を伝えると、「どの課題で書こうかな。」と楽しんでいる生徒の姿が多く見られた。作文の内容は生徒個々に多様であるが、生徒全員がリライト作文に取り組むことができた。さらに、早く終わった者が、「別の課題でも書きたい。」という意欲をみせ、取り組んだ者も数名おり、この課題は、意欲の喚起や思考力育成に有効に機能したと考えられる。

4. 成果と課題

「読み」は最終的には自力で読書行為を完成しなければならず、文章とどのように向き合い、どれだけ読みこむかであると考える。本実践は、一場面を一度しか読まないという手法ではあったが、生徒たちにとっては、思考を停止しない「読み」を創造させる授業となった。「生徒自らが見つけた疑問」を「課題」とし、全体共有しながら作品理解を深め、思考を賦活させるためには効果的であったと見てとれた。語句の理解や作文指導など、まだまだ課題は残るが、生徒たちが意見交流という言語活動を通して、自力で「読み」の世界や授業を深化させたことが成果だと考えられる。